書評

中野三敏著

「近世新畸人伝」

徳田　武

本書に収める五編の伝記研究、山崎北華こと「自堕落先生」・「井上蘭台」・「佚山道人黙隠」・「金龍道人敬雄」・「沢田東江」は、人も知る著者の足まめと古書探索への情熱が無かったならば、到底成就できるものではなかったろう。たとえば、どの編でもよいのであるが、任意に「佚山道人黙隠」の中から『国書総目録』に収められていない書籍を拾い出してみると、『修来印譜』『漢隷千字文』『伝家宝狐白』『滕王閣叙』『古篆論語』『草書千字文』『換瑋詩抄』等があげられる。これはどの図書館にも所蔵されていない以上、古書肆と所蔵者の間を丹念に掘り出す以外には目睹することのできないものであり、本書はこうした『国書総目録』未登載本を数多く用いることによって成りたった研究書といってよい。著者の常凡ならざる足まめが本書の成就に必須のものであったという所以である。

本書に採りあげられた人物は、著者が示すように北華には三田村鳶魚翁、蘭台には三浦叶氏、黙陰には三村竹清翁、東江には今関天彭翁の先鞭が着けられていたにしても、従来ほとんど本格的な研究の進められていない人々ばかりである。その主たる理由は、著者が初め本書の題名を「近世二流文人伝」と名づけようとしたという話に窺えるように、いずれも当代にはかなりの才能と活躍を見せていたにしても、文学史や学芸史の大道を歩んだ人々ではなかったことにあろう。だからといって、これらの人々をとりあげることが近世文芸史の構築に意味のない、好事家的な仕事かというと、決してそうではない。自堕落先生は、金鶏・焉馬・馬琴・春水といった戯作文壇の錚々たる人々が狂文または滑稽本の祖と認めており、平賀源内を滑稽本の祖とする現在の文学史の書き変えを迫るほどの人。蘭台は、林家の学風と徂徠学のそれとを折衷して古注疏学を唱え、井上金峨の折衷学を誕生させる契機となった儒者。黙隠は、つとに三村竹清翁が日本最初の説文学者と認定しており、普通に説文学の始祖とされている狩谷棭斎より早い時期の先覚者、金竜道人は、京都の学芸壇の中心人物であった序文先生。東江は、大田南畝などに影響を与えた初期の文人兼戯作者で、その書風が一世を風靡した書家でもあった才人。という具合に、著者は、各人がそれぞれのジャンルの史潮や騒壇の状況を形成するのにかなりの影響力を持っていた人々である、ということを明確に念頭に置いて、これらの人々の伝記をまとめられたのである。その意味で著者の選択眼は、文芸史を再編成するに必要な系統性を十分に保有しているものであった。

この五人の選択は、また次のような意味も持っている。五人の仕事の間口は、上は第一文芸の経学漢詩文から、下は第二文芸の戯作にまで拡がっている。従って、彼らを総体的に理解するためには、漢文学ならば漢文学のみ、洒落本ならば洒落本のみといっ

た、既製のジャンル別の文学史的視点では掩いつくせないのであり、同時代の雅俗にわたる文芸様式を領略する横断的な視野と力量が要請される。著者がそうした横断的な検討にたえる数少ない研究者の一人であることには夙に定評があったが、本書の人物採択は、そのことを見事に立証しているといってよい。

「はじめに」に、著者は本書を貫く記述方法を次のように述べている。

具体的な事実のみを記して、それに関する筆者の解釈は出来るだけ控えることを筆法とした……あるいは、いたずらに事項の多きを誇らんとする玩物喪志の仕業かとのそしりにも甘んじよう。著者の志のみ溢れに溢れて、対象を縦横無尽にひきずりまわすような勇ましい人物伝の氾濫は、いささか食傷気味である。

伝記研究の基礎が具体的な事実の積み重ねにあること、したがって従来の知見に多きを加えれば加えるほど伝記研究は進展することは、あまりにも当然のことである。とすれば、上のように事実の提示に徹することを意図した本書が枚挙に遑のないほどの新事実を加え、それだけ伝記研究書としてゆるぎのない堅牢な成功を遂げていることは、いわずもがなである。ここでそのような新しい事実の提示を逐一紹介する余裕はないので、ただ一点だけ五編中最も力作と思われる「沢田東江」から、事実の提示が人物の内面を窺うことに結びつく例をあげてみよう。今関天彭翁の「澤田東江」(『書苑』三巻二号)では明和四年の東江の改名を簡単に述べているが、著者は十七種の資料に就いてこれを考覆し、姓は平、名は鱗、字は景瑞、号は東郭から更に東江に改められた経過を詳述し、さらにこの改名が明和事件で招来された生涯最大の転機をやり過そうという東江の意識を反映したもの、と考えられる。事実の調査が調査のための調査に終らないで、東江の屈折した意識を引き出す契機を獲得するところにまで高められているのであり、その意味では著者の事実調査は単なる「玩物喪志」に止まらず、対象の内面に肉迫しようとする志向をはらんでいる。

が、勇ましい人物伝を嫌う著者の意図はよくわかるのであるが、それでも私としては対象への肉迫が志向または簡潔な叙述の程度に抑えられている点に、いささかの物足りなさを感じないではない。「自堕落先生」の死生観を論ずる部分に見られるように――著者はこれを若書きとして、触れられるのが迷惑であるようだが――、著者は人物の内面を論じて、論じつくせない人ではない。そうした著者の才筆を東江のような生涯も内面も屈折した対象に向けたならば、いっそう興味深々たる人物伝ができあがるであろうことは、論をまたない。そして、そのための資料がないではない。著者は「著述」の項において『来禽堂詩草』を比較的簡潔に紹介されたが、詩が文人の第一の自己表白である以上、これをもっと使用されてもよかったのではないか。東江の漢詩は古文辞派推称の明詩を学んでいるもののようであるが、「いかつげな格調もなし、一種の性霊も迸って」(今関天彭翁)、比較的素直に心境を吐露しているようである。とすれば、東江の内面を窺うには『来禽堂詩草』が絶好の資料である。現に著者も「移居」と題する七律を引いて(二〇八頁)、現世の栄達の望みの絶えた東江

の心事に軽く触れられるのであるが、同じく明和事件の後の七律といっても、「移居」と「春日書懐」では微妙に心境が相違しているようであり、詩の読みを通して東江のそうした心境の揺れ動きを描いたならば、東江の人間像は更に鮮明に具象化されるのではなかろうか。このことは、井上蘭台の『蘭台先生遺稿』や金龍道人の『雨新菴詩集』についてもいえるようである。

蘭台の学説を論じて、著者は、

その中心をなす「道」について論じるときは、宋学から仁斎・徂徠の学問まですべて否定しさり、直接仲尼に参ずるという、はなはだ求心的な陽明心学流ともいえる考え方に立つ

と結論されるが、この「陽明心学流」という言葉に、私はあるこだわりを感ずる。陽明心学の当代学界における影響は、「寓言論の展開—特に秋成の論とその背景—」(「国語と国文学」昭和四三年十月号)以来、著者の主張されるところであるが、蘭台と陽明心学のつながりを直接に示す資料が見出されていない現在では、蘭台のこうしたとらわれない見識は、徂徠学の刺激によって形成された、と考えるほうが自然なように思われる。蘭台の親友秋山玉山は、林家の門人でありながら徂徠学派にも出入した点で蘭台と一致するが、その学説も見識も甚だ蘭台とあい似る。たとえば、蘭台が古注疏学の立場に立ち、弟子に折衷学の井上金峨が出たごとく、玉山も古注疏学をとり、弟子に片山兼山や古屋愛日・昔陽兄弟のような折衷学の一方の祖を出している。また、蘭台の『詩範』の「韻字ハ古人ノ用ヒタルヲ用ユベシ。奇怪ノ字ハ一切ニ禁制スベシ」(六八頁)という論とまったく同様なことを、玉山は「韻選序」(玉山遺稿七)で述べている。さらに、蘭台の吾が好む所を好しとする見識(六四頁)も、玉山の「人各ノ志有リ。性ノ近シトスル所ヲ学ブバ可ナルノミ」(復二古公餗一遺稿十一)という考えと酷似する。以上のような二人の見識の相似は、両者が共に徂徠の古文辞学や気質不変化説の洗礼を受けている所から生じたもの、と私には思える。徂徠の気質不変化説と陽明学左派の李卓吾の「童心説」が共に先天的な個性を重んずる点では一致しているように、両者には因襲にとらわれない自由な考えかたを好む共通点があって、徂徠学で養われた蘭台のとらわれない思考法が陽明心学流に見える、ということもあるのではないだろうか。両学説のこのへんの関わり具合に関しては学界でもまだ未開拓で、私も自信をもってはいえないが、この問題はなお慎重に検討する要があるようである。

本書に採りあげられた人物は、何らかの点において、筆者が関心を抱く人物とつながることが多い。自堕落先生が『労四狂』下において寝ることに桃源境を見出しているのは(三八頁)、服部南郭の「寐隠弁」(南郭文集四・六)と同趣旨であるようである。筆者所蔵の都賀庭鐘の『全唐名譜』見返しに、「先篇既鏤　脩徠森玄中／后篇新刻　大江都庭鐘」とあるのは、これが佚山道人黙隠の修来印譜』の姉妹編であることを語っていよう。金龍道人が建部綾足の『西山物語』序文で「文人主義が戯作へと展開していく過程を把えた言葉」(一四一頁)として用いた「即俗為雅」は、かつて庭鐘の『英草紙』の性格を表わす言葉として筆者は用いたことがある。また、秋山玉山は沢田東江と親しかったようで、「与平

景瑞」（玉山遺稿十）は、両者が相互に著書の贈呈をしあう仲であったことを伝える。これらの事がらは、近世中期の文人が、一人一人ははなはだ個性的であるかのように見えても、実は時代の風潮に強く影響されていて、大局的に見れば同様の芸文と心境を保有している人々であったことを語っているのであろうか。

新刊紹介

今井卓爾著

『物語文学史の研究』

「前期物語」・「源氏物語」・「後期物語」全三巻

本書は、平安時代までの物語文学に関する著者の見解の総括として、既発表の諸論考をもとにしつつ、あらためて組織的・総合的に書き下されたものである。著者の意図や姿勢については、第一巻にあたる『前期物語』の「はしがき」に、〈物語文学が、「竹取物語」を起点にして変貌していって、その頂点に「源氏物語」があるということは、当然のこととして理解されており、特に大きな疑問がなげかけられないままになっている。この当然と考えられることが、はたしてそのとおりであるかどうかということについて、自分なりに確認する〉ために、〈物語文学についての現時点での見解をいちおうしめくくったものである。〉と述べられている。

全篇は『前期物語』『源氏物語』『後期物語』の三巻仕立で、『前期物語』のはじめに「序章 物語文学の研究」があり、『後期物語』の末尾に「結章物語文学史の研究」があって、全体をしめくくっている。これは著者の、〈物語文学史の研究は、物語文学の研究のある到達点であると考えられ〉、〈物語文学を文学史的に解明することの中に、物語文学の文学論的特性が把握される結果となる〉という主張によるものである。序章では、研究の基本的態度と対象、及び研究方法を述べるが、注目すべき点としては、物語と物語文学を区別する立場を取り、物語のうち文学的要素を内蔵したものを物語文学とするとしていること、史的研究を重視する所から、研究対象は、和文物語だけでなく、漢文体物語及び物語以前の、実態において物語類似のものまでを含むとしていることなどである。研究方法は、研究の前提として「成立」、作品論として「形態」「素材」「表現」、作家論として「志向」「享受」、それに「総括」の七項目を設定し、すべての対象についてこの七つの観点から検証するとしている。

この方法に従って、以下、「第一章文字文化の到来」、第二章から第一〇章までは「それぞれ、漢字体国書」「漢文体物語（その一）」「同（その二）」「竹取物語」「伊勢物語」「大和物語」「落窪物語」「宇津保物語」「散佚物語」の研究、「結」となっている。

『源氏物語』も同じ研究方法で、「第一章源氏物語の成立」「第二章 紫式部とその周辺」、以下第三章から第七章までがそれぞれ源氏物語の「形態」「素材」「表現」「志向」「享受」、「第八章源氏物語研究の総括」、『後期物語』は、第一章から第一二章まで「それぞれ「狭衣物語」「浜松中納言物語」「寝覚物語」「堤中納言物語」「とりかへばや物語」「散佚物語」「大鏡」「栄花物語」「歴史物語」「日記物語」「今昔物語集」「説話物語」の各研究、「結」「結章」という構成である。このうち「日記物語」というのは『篁物語』『平仲物語』『多武峯少将物語』『和泉式部物語』であり、また「説話物語」は「和文体説話」と「漢文体説話」に分れ、前者の中に『枕草子』『更級日記』を含む点が注目される。そして第一・第三巻の主要作品については、すべて前述七項目の節に分けて論じている。

「結章物語文学史の研究」は本書の結論で、五節に分れ、それぞれ物語文学の「動向」、「作品構造（短篇と長篇、史実と仮構、漢文体と和文体の問題）」、「作者構想（志向と著作、作者と享受者の問題）」、「構成（作者構想が作品構造に結果してゆく経過）」、「史的存在と評価」となっている。

以上が本書の内容であるが、読後最も印象的なのは、へいかなることについても事実の裏づけのないことは口にすべきではないということを最優先に〉（はしがき）する姿勢に支えられた資料の博捜と、緻密周到な論理構成であり、また特に『源氏物語』の精細な分析である。

〔奥津春雄〕

（『前期物語』昭52・2 八〇〇円、『源氏物語』昭51・10 八〇〇円、『後期物語』昭52・6 九〇〇円、早稲田大学出版部刊）